
幼馴染 = 恋人という方程式は成立するか

千龍風爽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染〃恋人という方程式は成立するか

【Nコード】

N6700W

【作者名】

千龍風爽

【あらすじ】

彼女はいつも、クラスメートから幼馴染の男子と一緒にいること
原因でクラスメートから夫婦と冷やかしを受けていた。
そこで彼女はいつも思う 幼馴染〃恋人 という方程式はあるの
か…と

方程式は成立しない

私は九十九蘭葉。

帝丹高校2年。

最近、同じクラスの工藤と蘭みたいな扱いを受けて最近、腹が立ってる

私には幼稚園から一緒、所謂、幼馴染の保谷^{ほや} 凌祐^{りょうすけ}っていう泣き虫な奴がいるんだけど、たまたま家がお隣さんでよく一緒に学校へと行くんだ。工藤と蘭みたいだね。

で、今日もたまたまばったり会って、一緒に学校に行くいつもは特に喋る内容がないからそのまま無言で行くことが多いんだけど、でも今日に限って話すことが合ったらしい。

しかも今、イラついてピリピリしてる私にとってはムカつく内容だった

「昨日休んだノートを見せてくれ」

かなーリムカムカと…、いつそのコト、ムカつくから殴ってやろうと思ったけど大人気ないし、止めた

ま、それに凌祐は、特別だからしょうがない。幼馴染しか知らないけど…というと私も特別な存在になってしまう。

私と凌祐は実は陰で芸能活動をしているといっても勉強優先だからたまーにしか活動しないし、CDは出してるけど、顔も公表してな

いいし、偽名&ユニット名使ってるし、皆には話してないから大丈夫。

でも何か自分でも言うのは何だけど、売れてるみたい。

よく友達が話してるのを聞く。でもその話をされてるときは私はその場を離れる。聞きにくいし。

下手なコメして、自分のコトがばれたらやバイから。

んで、学校へ行くんだけど…このときが1番嫌だ。
何でって？…冷やかされるから。

見てれば分かるんだけど…

「おはよー」

つてとりあえず挨拶するでしょ？そしたら

「はーいつ、未来の…もう夫婦か！1組目の夫婦のご登校ですーっ
！」

って大きい声で言われるのさ。これが1番大っ嫌い

凌祐は赤面して席に着く、私は特に気にしないでいつもどおりに席に着く

凌祐の隣の席に。

それと同時にもう1組の夫婦のご登場。

工藤と蘭。

工藤と蘭は私と凌祐と同じ班、工藤が私の後ろ。で、蘭が新一の右隣
私は1回、凌祐をつれて廊下に行く

「ねえ…テストも終わったし、1曲だけ新曲作らない？作詞はアン
タがやって。私は作曲するから。」

凌祐は少し考えてOKしてくれた。今日の放課後、事務所によって
聞いてみよう。

教室に入ると再び冷やかし。

頭にくるけど気にしない。気にするだけ面倒だから。

そつえば…今日って新役員決めるんだっけ…

面倒くさいなあ…。

方程式は成立しない（後書き）

何かありましたらお願いします。

感想等も待ってますので（*、*）ノ

b y 千龍風爽

方程式は…ってそれどころじゃない(前書き)

1話の次の日

方程式は…ってそれどころじゃない

そういえば…今日の道德の時間って、新役員決めるんだよね。
面倒くさい。…でもやりたい委員は何個あるわけで。

でも結構、副委員長とか…

道德の時間になんないとわかんないや。

私は凌祐の席に行って、「作曲は大体OKだけど作詞は順調？」と
聞きに行く

凌祐は「ボチボチ…」といいながら作詞をした紙を見せてくれた

…これボチボチじゃないじゃん。完璧じゃないか…

「じゃあ、後で家に来て…って隣だもんね。」

小さく笑う私に彼もつられて笑ってた
この時間が私にとって1番幸せな時間、この時間がずっと続けばいいの。

私は凌祐の席を離れて、蘭と工藤がいる…簡単に言えば、後ろを向いた

蘭と工藤と一緒に笑ってた。今の私達みたいに。
で、そこに園子が来た

園子はクラスメートみたいに蘭と工藤を冷やかす

「…相変わらず冷やかされてんね。」

凌祐も後ろを見た
小さく吹いてた。

「もう！園子ったら！私と新一はそんな関係じゃないって言うてるでしょう！？」

蘭と園子のやり取りに私は吹いてしまった。
工藤もポーカーフェイスを保ってるようだったけど微妙に赤面してるのがすぐに分かった

「はい、この時間は新役員を決めます。」

担任が司会を進める。黒板には、『委員長』『副委員長』『議長』『副議長』『書記』『文芸委員』『図書委員』『体育委員』『生活委員』と計9つの役員が書かれていた

全部の委員は男女各1人ずつ

私は…やっぱり考えたけど副委員長がやりたかった。

「じゃあ、この9つの中でやりたい委員がある、もしくは推薦のある人は挙手して」

私が手を上げようとしたら別の人が手を上げた

「委員長はやっぱり工藤だろう！」

「せんせー、私も工藤君がいいと思います。」

工藤は強制的に委員長

「じゃー…ココはやっぱり工藤といったら!？」

「ら…」

「先生、私、副委員長、やります。」

私が手を上げて言ってしまった
クラス中が静まった

だって…皆の中の方程式は 工藤〓蘭 なんだから。
私〓凌祐・ってコトは 私〓工藤 っていう方程式は成立しないんだから…

方程式は…ってそれどころじゃない(後書き)

次回も見てください

感想等も待ってます(*´`´ *)ノ

b y 千龍風爽

方程式なんてある訳がない

私は1回蘭を見た

悲しそうな顔をしてるけど私と目を見るといつもの笑顔に戻った。

今のことを言うならつくり笑顔か…
で、驚いたことに蘭と凌祐が文芸委員

みんなの頭は多分こんがらがっていることだろう。と思うと小さく
笑えてしまう

そういう私も少しは吃驚したけどね…

そういう私も踏まえて今、声に出して笑いたい。

明日から今日決めた新しい委員〓組織で動くことになった

…家に帰って作曲に取り掛かる。

テストも終わって、あとは結果を待つだけ。

…できればは聞かないで。悪いと思うから。

で、今日は凌祐と一緒に歌詞を曲と合わせる

とりあえず、歌詞と曲は合わさった。

あとは事務所に行くだけ。

事務所に行くと早速OKをもらってレコーディングの日を打ち合わせ
せて帰った

今日からか、新しい組織で活動するのって。…昨日、副委員長、辞任してればよかったかな。

蘭の味方を敵に回すことになったら困るし。

文芸委員と副委員長、交換できるかな。
でももう無理だよな。

はあ…

「はあ…」

口から出てくるのは朝から気の重い溜め息。

今日は凌祐とは会わなかった

でもその代わり、工藤と蘭にあった

「おはよー！蘭葉ちゃん！」

…相変わらず明るくて朝からは鬱陶しい。
とりあえず、挨拶。

工藤も眠そう、やっぱり2人が並んでみると夫婦だ。

「あれ？保谷君は？」

…あー、この人も 私〃凌祐 っていう方程式がなりなってるんだ。
超迷惑。

「…いつも一緒にいるわけじゃないから。勘違いしないでよ。」

「あ、そっか、御免。家がお隣さんでいつも一緒に登校してるから
…っていうくらい話は無しにして！！

ねえねえ、聞いた purple-orange がまた新曲出
すんだって！！」

…その話は今します？…張本人がいるって言うのに。

でも知らないからしょうがないよね。

私は蘭と工藤と一緒に行くのを止めて1人静かに学校へと向かった

でもそこでもまた新曲の話が…
もう今日学校休んじやいたい。

もう…いや…

みんなの目線、私達の新曲の話。

この世界からいなくなりたい…

方程式なんてある訳がない（後書き）

次回も見てください

蘭葉↓葉

凌祐↓凌

千「かなり疲れてるね？」

葉「当たり前でしょう。芸能活動はあんまりしてないけど、クラスメイトが煩いんだから。」

凌「本と本と。」

3人「次回も見てください！」

b y 千龍風爽

ちょっと方程式のことは考えるの止めよう

「これで委員会を終わります。」

やっと委員会終わった。工藤は勝手に椅子から立ち上がってそくさと帰って行ったんじゃないかって、勿論のコト、文芸委員会を行っている教室に行つて奥さんである蘭を待つてる

私も一応、新曲のことで凌祐と打ち合わせしたいことがあるから文芸委員会のやつている教室前で待つてた。

でも家がお隣さんだから…って思う人もいると思うけど、私は家で話すより学校帰りにのんびりしながら歩きながら話したほうがいい。

「ねえ、工藤、蘭のコト好きでしょ？…好きなのにアンタの隣にしないであげられなくて御免ね。」

「悪気があつたわけじゃないから。」

「…別に、ってかアイツとは幼馴染なだけで好きでも何でもねえ。だから副委員長が誰でもよかったんだ。」

「…嘘ばかり。」

「じゃあ、九十九だって保谷のコト好きなんじゃね？」

「あんな泣き虫を誰が好きになると思う？…まだ工藤のほうがよく
ぽどいいよ。カッコいいし、勉強もスポーツも出来るし。…いいと
ころっていったら…顔がいいところくらい？」

そんなことを話してる内に委員会が終わって蘭と凌祐が出てきた
蘭は工藤を見るとぽあっと明るい顔になってた

凌祐は眠そうに欠伸してる。

「あつ、らーあん！！」

園子。

蘭は園子ンとこいった

何かコツチにも気付いたみたいで手を振ってくれた

少し振り返す

「ねえねえ、蘭、蘭葉、保谷君、この後、カラオケ行かない！？…
勿論、工藤君は強制参加よ！」

…カラオケ！？楽しそう！
強制参加って。

一応、OKしたけどあんまり歌わないようにしよう。

カラオケボックスに来て歌うのは何年ぶりだろう

いつも歌うとしたら、家かレコーディングするところ。

園子が3時間パックを予約して部屋へ向かった

園子はマイクを握って蘭もマイクを握って2人で歌い始めた
… なんて、私達の前で私達の曲を歌う？

信じられん。

工藤は相変わらずの『超』がつくほどのド音痴で皆の耳を狂わせた

「ねえ、蘭葉ちゃんと保谷君も歌ったら！？ほら、もう次の歌入れ
ちやったし！！」

… もついい。私達の曲を自分達が歌う。笑えない。

でも園子と蘭にマイクを押し付けられ、私達は結局歌う羽目になった

… あーあ、もうバレてもおかしくないよね。そのときは腹から声を
出して笑っちゃえば… 何とかなるだろう

結局、歌った

「…嘘つ、蘭葉ちゃんと保谷君、purple-orangeに超似てる！！つか本物みたい！！」

正解です、私達は本物のpurple-prangeです。
そういたいけどいったら…

はあ、やっぱりどこに行っても出てくるのは溜め息だけなんだということを実感した日だった。

…日はまだ昇ってたけどね…

ちょっと方程式のことは考えるの止めよう(後書き)

次回も見てください

b y 千龍風爽

もうどうでもいい

今日も学校かあ…

ってかもう学校にいるんだけど。…何か、学校って面倒くさいって
思わない？

まあ、中には楽しくてしょうがないって人もいるかもしれないけど。

因みに今はお昼の時間だね。

「…蘭、弁当くれー。」

工藤は相変わらずに蘭の弁当に頼ってる

蘭は「はいはい」と工藤の母親のように工藤の弁当を渡す

「あ…なあ、蘭葉、弁当もう一つある？」

「アンタ…まさかお弁当忘れたの!？」

「…ソノマサカデス」

「バカじゃん！つかお弁当、持ってるわけないじゃん、私のヤツしかないよ！？」

「じゃあ、金、貸して学食買って来っから。…後で必ず返すから！」

「今日、食堂の人いないから学食売ってないよ？そもそも今日は弁当の日でしょ？」

「まったくコイツは本当にバカだ。」

「しかも学食がない日に弁当を忘れるなんて。頭がパー。」

「この台詞は私だからいえること。」

「多分、他の男子が言ったら半べソかく。」

「蘭の弁当でももらって工藤と一緒に食べてきなよ…まったくフォーク貸すから、勝手に突っついて食いな。」

「私は凌祐にプラスチックフォークを渡して、お弁当ごとあげた。特に私は食べたくなかったし。」

「あれ？蘭葉ちゃん、食べないの？」

「凌祐のバカが弁当忘れてきて、だから弁当ごとあげた。」

「えっ？蘭葉ちゃん、食べなくていいの？お腹すかない？」

「特にお腹へってないからいいよ。」

「私のお弁当分けてあげよっか？」

「それなら凌祐にあげて。私は自分のお弁当取替えして食べるから。」

蘭は少し苦笑してた。まあ、泣き虫にお弁当なんてあげたくないよね。

多分、冷やかし始まるもん。

こんな感じのヤツ

「おいおい、保谷、九十九から毛利に乗り換えるのか？工藤の喧嘩を貰うなんていい度胸してるな」

的な冷やかしが入って絶対に泣く。

弁当が食べ終わって、次はあれだって、文化祭の出し物。
係は、何か学年でステージに出る人と、作品を作る人と、クラスの
出し物に参加する人。

私は…余って足し人手が足りないところに行くつもり。
これだったら作品を作る人が結構余りそうだから作品を作る係に行
こう。

って思ったら、あれだったよ。ステージがかなり少なくて10人く
らい出なきゃいけないのに半分も出てない。

しょうがないから出た。そしたら何故か蘭と工藤が来た

園子もだったかな。

凌祐はステージに出たくないらしくて作品を作る人に行ってた

いつも歌ってるのに。

で、ステージのほうはダンスをやることになって何の曲で踊るかを決めた。

私達のグループⅡ2-Bは私達の曲で踊ることになった

全部パーフェクトに踊れるんだけど。PV見なくても。

何かこれ、私達が歌手ってコトばれそうな感じかも…

もうどうでもいい(後書き)

次回も見てくださいヾ(*´、*´)ノ
感想、評価等もお待ちしてます(*´^`^*)ヾ

b y 千龍風爽

本当か冗談か

今日から、ダンスの練習をするらしくて友達にCDを持ってきて、先生のパソコンを借りて、かけていた曲は…自分で言いたくないから言わない。

でも曲名は言わないけど結構、ノリがよくて…でもダンスは難しいらしい

私は前回も言ったけど覚えてしまってる身だから

あ、でもその前に位置を決めて、どんな服を着るのか決める

「じゃあ、位置、どうする？」

おお、流石園子、リーダーシップを取ってる。

「私、この前、PV見たんだけど、センターに2人、でその後ろに3人で、1番後ろに5人？だったかな。」

もうPV見てる人いるんだ。

早い…

「でもさ、何でPurple-orangeって出ないんだろうね。絶対可愛いのに…っ！しかもこの前ネットで見たら、あれだったよ、偽名使ってるんだって。

確か…」

「桜夜 紫と青夜 龍。だよな？確か、桜夜紫の方が女で、青夜龍が男。」

…あつ、喋っちゃった！！ヤバイ…なんか皆眼を点にしてコツチを見てる

私、設定的な感じで芸能人には全く無関心ってコトになってて…

その私が普通に芸能人の偽名…自分の偽名をさらさらと言ったらこれは大事件…

この言葉かなり撤回したい気分なんだけど無理だよな、もう喋った言葉は口には戻せないんだもの

「蘭葉って芸能人に無関心だと思ってたけど、実は結構好きだったりするの？特に…purple-orangeとか？」

「あれ、イトコが結構、芸能人に興味があって…それでこの前聞いたの、私結構、記憶力はいいいから…」

記憶が言いなんて全くの嘘。むしろその逆。

「でもさ、前、噂で聞いたんだけど、purple-orange
って学生って噂もあるんだよ。男女2人組みだし、もしかして蘭と
工藤君とか!？」

うん、確かにそのパターンもあるかもしれない。私と凌祐より…結構
お似合い。

「でも蘭葉ちゃんもありよね、可愛いし、歌上手だし。」

何か話に乗っかりにくい。いいよね?どうせ、練習してる最中には
れちゃうんだから。

「うん、そのとおり。」

…言っちゃった…

「え?そのとおりって?」

「…私と凌祐、purple-orangeです。」

「…ちよいとさ…かなり冗談きつくない？」

うん、最初はこんな感じなんだ。

じゃあ、実際に歌ってみれば…でもやっぱりバラスの止めようかな。

何か秘密にしてっていてもバラス人いるから…

「うん、冗談に決まってるじゃん！芸能人を全く知らない私が芸能界に入ってるってまずありえないから！」

…もう嫌だ

今度はライブ？

「…じゃあ、いい？曲流すよ。」

誰かの声と同時に曲が流れ出した
皆はPV見てるのに私だけそっぽ向いて普通に踊ってる

最初は何か足踏み的な感じなところなんだけど、皆の足音は聞こえない

「蘭葉、アンタ、本当に芸能人音痴？じゃないよねえ…」

だって面倒くさいもん、正体を隠すためにわざと踊りを下手な振りするなんて。

「一応、昔、ダンス教室に通って身ですから…それに言っただけ、いところがファンってよくこのダンス見せられたから覚えちゃって。」

うん、これは本当の話。イトコは私がpurple-orange
ってコトは知らない
だからいっつも私にダンスを見せてくる

このことに関しては皆普通に納得してくれた

普通は怪しむ人はいないと思うけど

「…蘭葉！！大事件！！」

…吃驚した、行き成り凌祐が入ってきた
皆、かなり驚いて一斉に凌祐のほうを向く

多分、凌祐が入ってきたってコトは芸能界関係

「何！？…御免、1回外出てくるわ。」

私は断ってから凌祐のトコに

「…ええーっ！？p u p p l e - o r a n g eの素顔を皆に公開するライブを行いたいーっ！？…あっ…」

慌てて口を塞ぐ…ってかおかしいじゃん。

今まで勉強とかで影響ないようにつて社長から言い出したのに…顔とか隠して偽名も使おうって。

バカ？…社長に対しては失礼だけど。

「蘭葉ちゃん？どうしたの？素顔とか…ライブとか？」

蘭だ…これはやばいぞ。
かなーりヤバイ。

「うっん、何でもない。ちょっと…すぐ行くから待ってて。」

作り笑顔で言っていると蘭は教室の中へと消えていった

「で、それっていつ？」

「学校祭終わった1週間後。だからもう前売り券発売するって言ってた。ってかあの社長も突然だから困るんだよな。」

「普通に困るって言うてる場合じゃないでしょ。はあ…ってかどうするの？園子とか蘭にばれたら大変なことになるよ。園子なんて結構恋愛ネタとかスキャンダルにしてるから夫婦同氏で芸能活動やってたっていうよ。」

私は平気だけどアンタは泣くね。」

「まあ…それはともかくとして、ばれないように対策を練るしかない。…話それだけだから。じゃ。」

…良輔って本当にお気楽もの。その性格見習いたいわ。
中に入ると園子に冷やかされた

蘭にも冷やかされた。何か園子はまだ許せるけど蘭に言われると何かいらした。

スカウト

「…ねえ、君達、芸能界って興味ある？」

声をかけられたのは突然だった。たまたま蘭とぼったり会って一緒に2人で帰ってたとき。

蘭は少し目を丸くして微妙に期待してるような感じ。

私は特に…もう凌祐と断言していいのかは分からないけど、入ってる身だから

「…私は結構です。もう芸能界に入ってるんで。」

蘭の前では、言っちゃいけないことだけど。これで逃げるのが1番いい。

「へ！？蘭葉ちゃん、芸能界に入ってたの！？」

「…聞いちゃうけど、君ってまさか…桜夜紫？」

「そのとおりです。ですので芸能界入りはお断りさせていただきます。…蘭、行こ。」

私は蘭の手を引いてその場を離れた
蘭は私をじっと見つめてた

人気の少ないトコに。

「…蘭葉ちゃんって本当にpurple-orangeだったんだ…。御免、私あの時信じれなかった。」

「いいの。だって普通に私、芸能界に入ってるんですって言っても信じるほうがおかしいって私は思ってるから。」

「じゃあさ、勿論、サインとか握手って出来るの!？」

目の色がもう全く違う。

「握手なら今してるじゃん。手、握って歩いてたんだから。」

蘭は自分の手元を見て笑ってた。がっちり握られている

「でも蘭葉ちゃんって本当にモデルさんみたいにスリムだし、顔もカッコいいって言うか、大人っぽって言うか…一言でまとめちゃうけどカッコ可愛い!!」

正直照れた。人にこんな風に言われるのって初めて。

それに蘭も私と同じくらいの体、そして顔。今からだって充分遅くないし、頑張れば私よりうえのモデルにだってなれる。

ジャンルは違うけど。

でも蘭にはそれほどの美貌がある。

ときたら、蘭をスカウトするならやっぱり工藤もスカウトするべきか？

当然だよな、2人は未来の夫婦…現在もだけど誰から見ても夫婦。ラブラブの夫婦なんだもん。

私にとって凌祐は恋愛対象じゃないし、たまたま一緒にいるところをスカウトされて、凌祐が気安くOKしちゃったことが始まりだし。

あくまでも凌祐と私はクラスメート兼幼馴染。夫婦ではない、工藤と蘭みたいに仲がいいわけじゃないし。

「あ、そうだ、蘭、私と凌祐が芸能活動してるってコトは誰にも言わないでね。今度、顔を公開するライブやるから、そのときまで黙ってて。」

「…分かった、頑張るよ!!! フォローするね。」

「有難う。」

私と蘭は再び…改めて宜しくという意味で握手した

スカウト（後書き）

次回も見てください。感想も待っています

b y 千龍風爽

初めての

「ねえねえ、らんらんも行くつよ！！コンサートっ」

らんらん…このあだ名はいつまで立ってもなれない。それがたとえ小1からの付き合いの友達でも。

らんらんと変なあだ名をつけたのは黒島美紀。

はつきりいうと可愛い子系で、クラスの皆からも好かれてるほうだと思う。

簡単に言つと蘭の少し可愛い子ぶった系？かなあ…

「御免、私、行かないわ。」

「えっ？用事あるの？？もうチケット予約しちゃったよ？」

「…もう勝手に取らない。」

私は小さくデコピン。美紀は小さく笑ってた

「蘭葉、何かあるの？気になるよ。」

「…当日になれば分かるよ。」

私が貴方が行こう行こうって行ってるコンサートの出演者ってコトに。

美紀は「じゃあ今度、別のコンサート一緒に行こう」「ってまた誘ってくれた

私は小さく頷いた。こういう美紀の性格が皆に好かれる

「…蘭葉ちゃん、大変ね。」

…人事に聞こえる、一応、励ましてくれてるつもりなんだろうけど
凌祐は小さく苦笑。

工藤は相変わらずという感じで机に伏せて寝てる

「…はあ…明後日かあ。」

…ん？何か…何か学校が揺れてるよ。

「きゃーあつ。地震！」

蘭は咄嗟に工藤に抱きつく

私はこういうのが大の苦手で無意識に凌祐をつかんだ

凌祐は「蘭葉!？」って言うてくれたようだけど何も聞こえなかった

後から聞いた話だけど工藤も蘭の体温で目を覚ましたらしくて「蘭」と呼んでいたらしい。

家に帰ってからニュースを着けたら震度が3・米花町の隣の隣の町が震源地らしい。

あ…今日だあ…
コンサート、コンサートだ。

凌祐と待ち合わせして、事務所によって挨拶してからコンサート会場に向かった

「…うわっ、すげー人の数。」

凌祐の言うとおり。かなりの人が並んでる、でも満席にはならないだろう。CDはとりあえず出したけど、顔も出してないし、TV番組にも出演してないからしょうがない。

楽屋で衣装に着替えて、歌詞の確認と囲えだしとか、凌祐と一緒に音合わせしたり。

「…蘭葉、凌祐、大変！！客席、満席なんだ！！」

「何だって！？」

凌祐は椅子を蹴り飛ばす勢いで、椅子から立ち上がった。
ヘアメイクさんが吃驚してたけど

気が重い、多分。その中には多分、美紀もいるんだろうな。

…蘭辺りとか普通に来てそう。

工藤も？蘭といえば工藤だから…

あっという間に本番はやってきた

「ふーっ。よしっ」

スイッチON

凌祐も深呼吸してた

「はい、GO！」

プロデュースさんの声で私達はステージにセンターに立ったと同時にライトが当たって観客が騒ぎ出す。

…御免、失礼だけではつきり言って煩い。

ーきゃーっつー

という声が耐えなかった

凌祐はりハーサルで言われたことも忘れて、啞然としてただって本当の満席。人がうじゃうじゃいるようで気持ち悪い。

「今日は有難うございまーすっ！！桜夜紫ですっ！！今日は楽しんでいてください、宜しくお願いしまーすっ！！！」

またまた歓声。

「青夜龍です！！宜しく！！！」

また歓声。

「今日は突然のコンサートに来てくれて有難う！」

笑顔を振りまく

そして自分達のことを話した、高校生だということ。自分の本名とか…

結構、みんな、予想外のコトで結構驚いてた

「じゃあ、一通り歌ったところで早速、曲に行くよ！…1曲目は、私達のデビュー曲…」 YES or NO ”！」

初めての（後書き）

曲名は適当です（笑

次回も見てください（*
、
、*）ノ

b
y
千龍風爽

いっしょ

多分、ライブは盛り上がったと思う
…歓声も凄かった。

いつもTVとかでしかライブ中継とかそういう生放送的なものを見てなかったから実際にこういう場の圧力には正直驚いた

凌祐も会場では笑顔を振りまいてたけど、終わると魂が抜けてた
私がひっぱたくと魂が戻って様な顔をしてた

お母さんから電話来た、お母さんとお父さんは仕事の関係で海外にいる。

確か…工藤もだね？

…あーっ、工藤となんでいろんなことが同じなんだよ！！

最悪。蘭と工藤が何でも…でもそうとも限らないのか？
でも工藤と蘭は幼馴染。

いつも一緒にいる。この前、蘭の家に行ったら工藤と同じだって言っていたマグカップ。

そして蘭の部屋にお邪魔すると先に目に入っただのは工藤と蘭がピク
スしている2人のお写真。

恋人みたい

工藤もこれと同じ写真を持ってるって言った

…本当、”一緒”

何でも一緒。

私と凌祐はそんなのない。

あるものっていったら保育園で作った色違いの縄跳び。

もう色なんて全然なくなってしまったような感じだけど、私にとっ
ては宝物。

多分、凌祐も一緒だと思う

私と凌祐との一緒は工藤と蘭の一緒とは違う

私と凌祐の一緒は「一緒に登校する」くらい。一緒だけど意味が違う

こつという意味では工藤と蘭は同じコトが言えるかもしれないけど、
工藤と蘭は他のコトでも一緒がいっぱいある。

学校に行くと歓声が凄かった

「蘭葉、私吃驚しちゃった！！だって蘭葉が桜夜紫なんだもん！！超蘭葉にびっくりな美名だと思った、カッコいいし、かつ蘭葉は可愛いし。」

そうやって真っ先に言ってきたのは美紀だった

とりあえず私はお礼を言った

私が心配なのはこうやって言われることじゃなくて、男子が凌祐を冷やかして、凌祐が泣かないか。

いつも思うけど、何で私は凌祐のことばかり心配してしまうんだろう。他の女友達よりもはるかに凌祐だけを特別に心配している

恋愛感情は抱いてないつもりだった

でも…これが恋ってヤツなの？

ありえないありえない！！何で私がアイツのコトを好きになってしまっただろう

そんなヤツを好きになるのなら私はもうとくに蘭から工藤を奪ってしまおうと考えてると思う

もう自分の気持ち分からない…

いっしょ（後書き）

蘭葉は自分の気持ちに気付けるのか…？

感想等待着ってます〜またキャラクターの質問も受け付けてるんで…

b y 千龍風爽

後

社長のせいで学校生活は大変になった。あのバカ社長のせいで。

学校に行くと、昭和の漫画じゃないけど、靴箱からドバーっとレターが…
思ってくれるのは嬉しいんだけどちょっと迷惑。

「…相変わらず凄いレターの量だよな。」

凌祐もレターを持って苦笑しながら私に言った

で、レターよりも何より困るのが陰口

私は、皆もそうだと思うけど私は陰口を言う人が嫌い、別に自分のコトを悪くいわれてるからって言うわけじゃなくて言いたいことがあるのなら本人の前で直接言えいいじゃんってお話。

「あらー、芸能界の…事務所行かなくてもいいの？お仕事は？
…もしかしてないの？」

こういうのって結構ぶりっ子？大嫌い

とくに女子ってこういうヤツ多い、たまーに男子でも私と凌祐のユニットってコトで「夫婦」っていうやつが増えた

でも気にしない、時間の無駄。

「…蘭ちゃん、大変だね。」

蘭ちゃんっていうのは私のあだ名。今私に話しかけた佳織がつけた。でもこれがまたややこしくて近くに蘭がいると「え？」ってお話、その度に佳織は「蘭葉ちゃん」と呼びなおす

「そうでもないよ、それより、最近は大丈夫？」

「…無理だね、やっぱり生理的に駄目なのかな、男の人って。だって…最近、かなり嫌だよ、こっちみてはからかう様にお辞儀したり、手を上げてくるし、酷いときには私に話しかけてくる、とりあえず無視無視つつしてしてるの。で、私がちょっかい出されてるときに、その仲間の男子を見るとコツチをニヤニヤしながらみて…キヤーツ、もー嫌だよ…蘭ちゃん、何とかして!!」

…がっしり手を握られた、もうこればかりは引き受けるしかないのかな。でも佳織は蘭ではないよ、ショートヘアだし、だけど性格も顔をかなり可愛い、女の子中の女の子。純粋な心を持つてる感じがするんだ。

一肌脱ぐ?…か。

「で、その男子の名前って?」

「川本、山井…とか本崎とか…あーっ、もー顔なんて思い出したくない!」

…本当にこの子は生理的に男子が駄目らしいです。

後（後書き）

次回も見てください

b y 千龍風爽

性別（前書き）

内容はおかしくてないです。

性別

「…ねえねえ、ちょっと、アンタら、顔かして？」

私は佳織が困ってる男子のトコに言って、声をかけた。

何か普通に声をかけてる感じするでしょう？実際はかなり、声のトーンが低い

男子は「はあ？」って顔して、コツチをむいた。目つきとか超最悪。

私は強制的に男子を中庭に連れ出した

「何だよ、芸能人が俺たちに何の用？」

「今は芸能人うんだらじゃねーよ。…テメーらさ、佳織のコト知ってんだろ？」

「ちょっかいかけるの止めろよな。」

「うわっ…コイツ、どうしたの？行き成り男になっちまってるぜ。うけーるっ。」

…凄くうざい、これは私の1つのくせみたいなもので。男に怒るときは男口調になってしまう

小さい頃？大体中1くらい？これってもう小さい頃とは言わないの？

まあ、それくらいから始まり、母親にも散々注意され、でも定着して止められんというこの現状。

「…ていうか私、いつも思うけど、あんた達ってただ強がってるだけで、中身って全然弱いんだよね。」

そんな男子、あんた達が、人のコトをバカにするなんてチャンチヤラおかしくて笑える。」

「…たく、うるせーな。止めればいいんだろ？分かりました、もうしません！…これでいいんだろ？あん！？」

「…ちゃんと本人の前で土下座するような気持ちで謝れっ！！このバカ男子がつ。」

私…は本当に女ですか？
見てる皆さん、教えてください。

男子達は微妙にビビって去っていった

とりあえず、男子の件、これで終了

後日、佳織から「有難う」ってメールが来た。
何とかなっただけだ。

性別（後書き）

次回も見てください
感想、待ってます

b y 千龍風爽

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6700w/>

幼馴染 = 恋人という方程式は成立するか

2011年11月17日20時41分発行